

大崎は、茶苑の“一大テーマパーク”が存在したまち。

私達のまち「大崎」の歴史の中に埋もれた興味深い事柄や、ゆかりのストーリーを訪ねる「大崎今昔物語」。

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNAの一端が、少しでも明らかにできればと願ひ、

一話完結のシリーズとして取り上げていきます。その第二話は、

大崎に、趣向を凝らした11もの茶室を配した一大庭園が存在した話。大崎に古くから開花した伝統文化のありかを訪ねます。



鳥根県出雲市の「出雲文化伝承館」に復元された「独楽庵」



「出雲文化伝承館」内の「独楽庵」入り口



同上、「独楽庵」外観



御殿山の名と併せて、かつて大名の下屋敷が広がっていたことを思わせる近隣の行まい



「独楽庵」など、11もの茶室を揃した大崎苑の絵図

日本で初めての、茶室のテーマパークであったとされる「大崎苑」。松江藩松平家の大崎下屋敷に花開いた茶の湯の伝統文化は、大崎の文化的ルーツとしてこの地に生き続けます。



ハツ山通りとソニー、御殿山小学校などが目印ともなる、「大崎茶苑」があった辺り。



「しながわ夢さん橋」会場にミニ茶室が出現。松平不昧公のキャラも参加して、松江市との縁を温めました。

の茶室は残念ながら取り扱われたのですが、「独楽庵」は現在、鳥根県出雲市の「出雲文化伝承館」に復元展示され、大崎苑の面影を伝えています。茶の湯の文化が開花した地、大崎。由緒ある歴史のストーリーを、地域の資産として。松平不昧公の築いた「大崎苑」の名残りは、現在大崎には残念ながら存在しませんが、その史実と、下屋敷があった地としての大崎と松江市との縁は今も生き続けています。とくに松江市は「しながわ夢さん橋」に「松江開府四〇〇年祭」連動イベントとして出展参加。歴史のストーリーを共有する2つの地が、手を結び、これからも地域の文化的ルーツを新しい時代へとつないでいきます。



松平不昧公の肖像画（月照寺蔵）

下屋敷に移築させた歴史的価値の高いものでした。茶道三昧の晩年を送った不昧公は、68歳の年にここ大崎下屋敷で他界。その後多く

地形を生かした庭園に、千利休が造った「独楽庵」をはじめとする11もの茶室が。江戸時代、「大崎屋敷」や「大崎苑」とも呼ばれた出雲の国鳥根県松江藩松平家の江戸下屋敷が現在の北品川五丁目付近にあり、そこには数多くの茶室を擁した大茶苑が広がっていた、という史実をご存じですか。松江藩松平家は徳川家康の次男を祖とする大名で、この大崎屋敷の主となったのは七代藩主、松平治郷（不昧公）でした。不昧公は江戸時代の代表的な茶人の一人で、不昧流と称される大名茶を完成し、茶禅一味を追求したことで知られます。不昧公は隠居後、この大崎下屋敷に住み、茶道員の名器蒐集とお茶三昧の余生を送ったのですが、とくに注目されるのは、趣向を凝らした11もの茶室が散在する「大茶苑」の建設。これは日本でも初めてのテーマパークであったと言われています。なかでも茶室の「独楽庵」は、千利休が宇治田原に造ったもので、大阪にあったものを不昧公が大崎下屋敷に移築させた歴史的価値の高いものでした。茶道三昧の晩年を送った不昧公は、68歳の年にここ大崎下屋敷で他界。その後多く